

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-110	21-037	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b> Alcohol Consumption Levels as Compared With Drinking Habits in Predicting All-Cause Mortality and Cause-Specific Mortality in Current Drinkers 飲酒者におけるアルコール消費量・飲酒習慣と総死亡・死因別死亡リスクとの関連について		
<b>執筆者</b>		
Ma H, Li X, Zhou T, Sun D, Shai I, Heianza Y, Rimm EB, Manson JE, Qi L.		
<b>掲載誌</b>		
Mayo Clin Proc. 2021 Jul;96(7):1758-1769. doi: 10.1016/j.mayocp.2021.02.011.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
総死亡率、死因別死亡率、アルコール消費量、飲酒習慣		34218856
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b>過度の飲酒が死亡率を上昇させることは明らかなが、中等度の飲酒が与える影響は明確になっておらず、特に飲酒習慣を勘案した報告は少ない。そこで、アルコール消費量と飲酒習慣について、総死亡および死因別死亡リスクとの関連を検討した。</p> <p><b>方法：</b>2006-2010年に英国の22の調査センターにおいて行った調査より、健康な飲酒者316,627名を対象とした。日常的な飲酒(週3回以上の飲酒)の有無と飲酒時に食事も摂るかどうかについて、それぞれ好ましい習慣に1点ずつ加点する飲酒習慣スコア(Drinking habit score: DHS)を定めた。飲酒習慣スコアと死亡率の関連は、年齢、性別、調査センター、人種、貧困度、BMI、喫煙、身体活動、食習慣、糖尿病、高血圧、脂質異常症、アルコール摂取量で調整したコックス比例ハザードモデルを用いて検討した。アルコール消費量との関連は、アルコール消費量を5段階(純アルコール0-50g/週、50-100g/週、100-200g/週、200-300g/週、300g/週以上)にカテゴリ分けし、同様の解析をDHSで調整して行った。</p> <p><b>結果：</b>追跡期間の中央値は8.9年、死亡例は8652例(心血管疾患1702例、がん4960例、その他1990例)であった。アルコール消費量を含めた多変量で調整したハザード比を検討した結果、DHSが高いほど、総死亡(P for trend&lt;0.001)、心血管疾患死亡(P for trend=0.03)、がん死亡(P for trend&lt;0.001)、その他の死亡(P for trend&lt;0.001)は少ない傾向を示した。また、アルコール消費量の総死亡および死因別死亡リスクに対する影響は、DHSにより異なっていた。アルコール摂取量と総死亡について、DHS 1点ではJカーブの関連を示した(P for quadratic trend=0.02)が、DHS 2点では、純アルコール50g未満/週に対し50-300g/週でリスクが低くなるUカーブの関連を示した(P for quadratic trend=0.003)。</p> <p><b>結論：</b>飲酒者におけるアルコール消費量と死亡リスクとの関連は、飲酒習慣により異なることが明らかとなった。アルコール消費量に基づいた健康管理については、飲酒習慣も考慮することが重要であることが示唆された。</p>		